

原 著

超音波診断を含む妊婦健診と、 超音波診断を含まない妊婦健診を受けた妊婦の体験

— 妊婦の心理と身体感覚を中心に —

鈴 井 江三子^{*1}

要 約

超音波診断を含む妊婦健診を受けた妊婦と、同法を含まない妊婦健診を受けた妊婦を対象に半構成的インタビュー調査を行い、得られたデータを質的、帰納的に分析した。調査対象施設は双方共に助産所であり、助産師により妊婦健診が提供されている施設を用いた。調査はインタビューガイドを作成し、(1)超音波診断を受けた感想(2)画像をみてどう感じたか(3)画像はどのような風に見えたか(4)妊娠についてどう感じているか、4つの項目を中心にインタビューを進めた。

その結果、超音波診断による妊婦健診を受けた妊婦は、全員が画像をみることで胎児の発育が分かり嬉しい、安心する等の肯定的な感情を表出していた。しかし、その一方で画像上に写し出された断層像と胎児画像を識別することは困難な状態であった。したがって妊婦が画像を見ることが、直接的に妊婦の心理的効果を促すのではなく、画像に対する診察者の説明や超音波診断に対する期待等が複合的要因として影響を与えているといえる。また妊婦は、妊婦の身体感覚により妊娠を実感していたことから、胎児情報の視覚化が妊婦の身体感覚を鈍化させていたとはいえなかった。

緒 言

妊婦が胎児画像をみることにより胎児の存在を確認し安心する¹⁾。または胎児の発育が順調であることを知り²⁾、リラックスし自信を得る³⁾。さらに妊娠初期に胎児画像を見ることで妊娠を実感し^{4,5)}、妊婦と胎児のボンディングを高める^{6,7)}等、胎児画像と妊婦の心理的効果の関係性に関する量的研究が多数報告されてきた。しかしその一方では、妊娠中に胎児画像を見ても胎児の存在は実感できず⁸⁾、妊娠中や産後のボンディング効果にはつながらないという指摘もあった⁹⁻¹¹⁾。つまり妊婦が画像上に写し出された胎児画像を視覚で捉えることと、妊婦の心理的効果の有無が長年議論されてきたのである。

上記の議論以外に、社会学領域において胎児情報の視覚化が妊婦の身体感覚に与える影響についても論考されてきた。なかでも Duden は超音波診断の導入により、視覚によって胎児の存在を捉えることが妊婦の身体感覚にどういった影響を与えたのかに着目した。それは超音波診断という技術が与えた身体への影響、すなわち「どんな表象形態や知覚様式

または身体感覚が、この新しい技術によってもたらされたのか¹²⁾を、女性の体験した身体の経験を歴史的資料から解釈することで考証したのである。その結果、1970年代から急速に普及した超音波診断は医師だけでなく妊婦に対しても、不可視な存在であった胎児の視覚化を可能なものとして提供するようになった。そのため画像上に写しだされた胎児の存在は現実のものとして価値を持ち、妊婦が感じる身体からの情報は重要視されなくなったという。またそのことが見えないもの、つまり妊婦の身体感覚に対する信頼性を低下させた¹³⁾と警告した。

これらの研究が示唆するように、超音波診断を用いた妊婦健診により胎児の視覚情報を受け取る妊婦は、実際はどのような体験をし、それをどう意味づけているのか。また胎児の視覚情報が提供されることにより、妊婦の身体感覚は本当に鈍化したのか。さらに超音波診断を含まない妊婦健診を受けた妊婦はどうであるのかを理解していく必要がある。超音波診断による妊婦健診が一般的に普及している現在、妊婦が求める妊婦健診を提供する専門職として、妊婦の体験を理解することは意義があると考える。

*1 川崎医療福祉大学 医療福祉学部 保健看護学科
(連絡先) 鈴井江三子 〒701-0193 倉敷市松島288 川崎医療福祉大学

そこで本研究では、超音波診断を含む妊婦健診と超音波診断を含まない妊婦健診を受けた妊婦が妊婦健診中にどのような体験をし、それをどう意味づけているのかを理解しようとするものであって、妊婦健診のあり方を再考する一助となると考えた。

研究方法

1. 研究デザイン

本研究目的に沿って、超音波診断による妊婦健診を受けた妊婦と、超音波診断を含まない妊婦健診を受けた妊婦が、妊婦健診中どのような体験をしているのか、妊婦の語りを通じて質的帰納的に探索した。

2. 具体的な研究方法

2.1. 研究対象者

日本の場合、妊婦健診を提供している医療機関の種類は病院、診療所、助産所の3施設である。このうち病院と診療所の機能・役割は類似しているが、助産所と病院・診療所ではそれが異なる。そのため今回の研究では、医療サービスが類似する医療機関に焦点を当て、超音波診断を用いた妊婦健診を提供する助産所と、超音波診断を用いない妊婦健診を提供する助産所の2場面に存在する妊婦で、研究協力の同意が得られた9事例を分析の対象者として選定した。対象者への倫理的配慮は後述する。

2.2. データ収集方法

2.2.1. データ収集：半構成的面接法

2.2.2. データ収集期間：2001年4月初め～2002年9月末まで

2.3. データ収集の手順

2.3.1.

対象者のあるがままの体験を理解するために、研究者の思い込みや操作を避けるため調査実施前にはプレテストを行い、質的研究者である社会学者から面接方法についてのスーパービジョンを受けた。またプレテストのデータを基に、①超音波診断を受けてどうでしたか、②画像を見てどう感じましたか、③画像上の像はどのようにみえましたか、④妊娠していることについてはどう思いますか等、インタビュー用ガイドラインを作成した。ただし質問事項は決めていたが、調査の枠組みの中で順次行うことは避け、対象者との会話の流れを尊重して自由に語ってもらった。

2.3.2.

面接の回数は、1人の妊婦に対して妊娠初期、妊娠中期、妊娠末期の3回を原則とした。また面接時の内容が不十分な場合は、早期産褥期の落ち着いた時期に面談し、データの補足と内容確認を行った。面接は妊婦健診終了直後に別室で行い、得られた

データは妊婦の承諾を得て全てテープレコーダに記録した。会話の途中では随時妊婦が語った内容を復唱し内容確認を行い、分析時の解釈が先入観や操作的でないように配慮した。

3. データ分析方法

本研究は研究協力者の主観的記述を目的とするために、それを目的とする質的帰納的研究方法を用いた。

具体的な分析手順は得られたデータを全て逐語記録に起こし、全体の意味を得るため記述された全データを通して読んだ。次いで、研究者の判断や価値観を排除するためにデータの再読を複数回行った。そして記述されたデータから「超音波診断」「画像」「妊婦の心理と身体感覚」についての語りを抽出した。また抽出された文章を内容が同じものに分け、共通する意味を明確化した。

4. データの信頼性・妥当性の確保

プレテストから本面接、分析に至るまで研究指導者からのスーパービジョンを受け、得られた情報の信頼性を確保した。また妊婦の語りを解釈する際は、研究者の判断に傾倒しないよう面接内容の逐語記述と研究者の記録および解釈内容を、質的研究を専門とする文化人類学者1名と社会学者1名に提出し、修正の往復を行うことで解釈の信頼性、妥当性を確保するように努めた。

5. 調査上の手続きと倫理的配慮

調査上の手続きは調査施設へ電話で面談の了解を得た後、2001年5月2日、岡山県内にあるA助産所院長と面談し、本研究の趣旨および研究計画の説明を書面にて行い、研究協力の同意を得た。次いで2002年2月17日、広島県内にあるB助産所院長と面談し、同様の手続きを経て本研究協力の同意を得た。その際、同意書への記載をもって同意とした。

調査対象者からの情報収集を実施する際は、妊婦に対して妊婦健診前に助産所院長から研究の趣旨説明が口頭により行われた。その後、同意が得られた妊婦のみを対象に、調査者から直接研究計画の説明と協力をお願いを行った。その際、研究計画書と同時に妊娠についての経過に関する質問票を手渡し、その記入を持って同意とした。また説明時には研究結果の公表は個人が特定されないことや学会以外では公表しないこと、調査途中にはいつでも協力が断れることも説明した。

6. 用語の定義

妊婦の心理とは、妊娠したという事実について、それをどう受け止めているのかという妊娠の受容や胎児の存在についての意識、および胎児観等、妊娠に伴う心理をいう。身体感覚とはつわりや胎動、ま

たは腹部の増大や乳房の発育等，妊娠に伴って妊婦が知覚する身体的な変化をいう。

研究結果

1. 対象者の概要

対象者は超音波診断を含む妊婦健診を受けた妊婦3事例(全員初産婦)，超音波診断を含まない妊婦健診を受けた妊婦6事例(初産婦1事例，経産婦5事例)であった。前者の妊婦の年齢幅は24歳から29歳であり，妊婦健診を受けた回数は最少回数13回，最多回数16回であった。超音波診断を受けた最少回数は13回，最多回数は16回であり，このうち経膈法の回数幅は0から2回であった。

他方，後者の妊婦の年齢幅は27歳から42歳であり，妊婦健診を受けた回数は最少回数4回，最多回数10回であった。今回の妊娠では全員が超音波診断を受けていなかった。また超音波診断を含まない妊婦健診場面において初産婦のデータ収集を行うことは困難であり，経産婦に傾倒したデータ収集となった。これは助産所での出産数そのものが全出産数の1%¹⁴⁾であること，助産所で出産をする初産婦が極端に少ないこと，また今では助産所でも超音波診断を用いた妊婦健診を提供する施設が殆どであり，期限内でのデータ収集数には限界があった。

両場面に存在する双方の妊婦は，共に自然出産を希望するために助産所を選択したという共通の意識がみられた。しかし超音波診断を含む妊婦健診を受けた妊婦は，胎児の異常を早期に発見するために超音波診断を提供する助産所を選択していたが，もう一方の妊婦は超音波診断の臨床効果に対する期待が低いために超音波診断を含まない妊婦健診を選択したという違いがあった。また後者の妊婦は前者の妊婦に比して年齢が高く，経産婦が多いという偏りがあった。したがって両者の比較検討を行う際は，「超音波診断に対する意識が違う」「両者の年齢差が大きい」「出産回数が違う」ことを考慮して，分析を行うように努めた。

なお，結果の提示には妊婦の体験が明確に提示できるよう，必要に応じて妊婦の語りをそのまま用いた。その際は，研究者の解釈を地の文章として述べながら，抽出した妊婦の語りを「」の中に示した。妊婦の語りを研究者が補足した場合は，「」の中に()で示した。

2. 超音波診断を含む妊婦健診を受けた妊婦の体験

超音波診断を含む妊婦健診を受けた妊婦に対して，超音波診断を受けてどう感じたのかをたずねた際に，共通していたのは「赤ちゃんが見えて嬉しかった」と明確に語ることであった。しかし，それがど

ういった風に見えたのかを語ってもらうと，その答え方は「赤ちゃんが見えた」と答えたときよりも不明瞭なものになった。

2.1. 画像に対する妊婦の認知と識別

2.1.1. 妊娠初期の妊婦の語り

妊娠初期の妊婦は胎児の形態が完成していない時期であっても，断層像の中に人の存在を認知していた。しかしこの場合，妊婦が認知したものと断層像上に写し出された胎児画像の描写は異なるものであった。

①妊婦自身による画像の解釈

「周りの黒っぽいのかと思ったら全然違って。(画像は)自分なりに勝手に解釈している，勘違いしたままで多分(赤ちゃんが見えたと思うのは)先生の言葉が一番大きい，自分の目と説明が一致した時点であつ，見えたって思う」という。

診察者の説明がなければ画像上に写しだされている胎児画像が胎児のどの部分であるのか識別できず，妊婦自身の解釈で人としての存在を認知していた。

②妊娠反応が陽性という診察の文脈効果

「(妊娠の)陽性反応が出て，しかも自分の子宮を見て赤ちゃんを探す為に(超音波診断を)やるわけでしょう。そしたら(超音波診断の画像を見たら)赤ちゃんだと思いますよね，思いました」という。

妊婦は，妊娠反応が陽性という事実のもとに超音波診断を受けているため，同装置上に写し出された像は当然赤ちゃんであると認識していた。

③想像による断層像の解釈

「映像がはっきり形が分からなかったから，こっちが頭で手で足があつてというか，そういう形が。先生の説明のままにああそうなんかなあって思いながら。(不明瞭な断層像の中にも)赤ちゃんがいるっていうのは分かるんです。ざーっとなっている中にも形が見えるんです」という。

妊婦は識別が困難な断層像を妊婦の想像により補足し，それを「赤ちゃん」の存在として認知していたのであった。

2.1.2. 妊娠中期の妊婦の語り

妊娠中期になっても，妊娠初期と同様，妊婦の断層像と胎児画像の識別は困難なものであったが，胎児画像に関する診察者の説明が妊婦の認知につながっていた。また動画を見ることも妊婦の楽しみになっていた。

①診察者の説明

「(先生の)説明がないと直ぐには分からなかった。多分まるが写ってたら頭かお尻か考

えているだろうから、超音波は先生の説明がないと分からない。ザーとなってる、分からないですね。想像してみるんよって言われても見にくい。想像ですね。みても分からないんだけど、動いているのは分かるから、楽しみです」という。

診察者が説明した言葉によって不明瞭な断層像が胎児の形として枠付けされ、妊婦の認知を促したと考えられる。

2.1.3. 妊娠末期の妊婦の語り

妊娠末期になると、妊婦の断層像と胎児画像の識別はさらに困難なものとなり、画像に対する関心もより一層低下していた。だがそれでも妊婦は、超音波診断が楽しみであるという。

①見るのが楽しい画像

「超音波自体は、全然画面からはみ出すぐらいになってるから部分部分しか写らないじゃないですか。だから全然(何が写っているのか)分からない。分からないけど楽しみです。映像みて分かんないけど、見ながら先生が色々言ってくれるから。色々想像できて楽しい」という。

妊婦は、超音波診断を受けながら画像上に写し出された胎児画像についての説明を聞くのが楽しみであるという。また胎児画像を用いた説明は、妊婦と診察者のコミュニケーションを触発し、こどもに関する妊婦の想像も喚起させていた。

以上、妊婦は全妊娠期間を通じて断層像と胎児画像の識別は困難であると語っていたが、不明瞭な断層像を人の存在として認知し、嬉しい、楽しい、こどもを想像する等の肯定的な感情を促していた。このように妊婦が識別困難な画像を見ても、そこに人の存在を認知し肯定的な心理を促すのは診察者の説明、妊婦の想像・解釈、妊娠反応が陽性という診察の文脈効果等が、認知要因として妊婦の意識に影響を与えたためであると考えられる。

では、どうして妊婦は識別できない断層像であっても、それを見るのが楽しみであるのか。次いで、超音波診断に対する妊婦の意識を明らかにした。

2.2. 超音波診断に対する妊婦の意識

妊婦に共通していた語りは、毎回の妊婦健診時に超音波診断を受けるのが楽しみであるという。それは超音波診断そのものに対する期待であった。

2.2.1. 妊娠初期の妊婦の語り

①人の形・動作がみえる

「今日は前よりもやっぱり人間らしくなってるみたいで。まだ1センチぐらいらしいんですけど。心臓も、多分これが心臓っていうの

が分かったみたいで」という。

妊婦は、画像の中に動く像を見ることで胎児が順調に育っていると認識し、嬉しい気がするという。とくに前回の妊娠が自然流産であった妊婦は、今回の妊娠でもその可能性を恐れ、超音波診断を受けることで妊娠の継続を確認し安心感を得ていた。

2.2.2. 妊娠中期の妊婦の語り

①胎児の成長・発育や正常性の確認

「画像を続けて通して見ることで大きくなっている様子が分かる。五体満足かどうか一個一個確認してもらいたい。大体何センチか聞ける。大きくなっているのが分かる」という。

妊婦は、超音波診断による胎児の形態確認や身体各部の計測値を聞くことで、胎児の成長・発育や正常性を確認し、それによって嬉しい、楽しい等の肯定的心理を促していた。

2.2.3. 妊娠末期の語り

①顔や性別が分かる

「(妊娠の)後半は、顔とかよく写るといいなあとか、それくらいの程度だけど。でも毎回(超音波診断は)あるのが当たり前だし、なかったらちょっと残念というか。やっぱり写して欲しい。映像は全部写らないからそういう意味で初期とか中期に比べるとすごい楽しみじゃないけど、後期は顔とかが写るのが楽しみ。性別が分かるかなあとか思ってきたけど、今日も分からなかった。分からないけど楽しみ」という。

妊婦は、妊娠末期になると断層像と胎児画像の識別が殆ど困難であるにもかかわらず、超音波診断を受けることが楽しみであるという。また定期的に用いられる超音波診断の存在は日常的であり、むしろ同法を用いないことの方が非日常的であるという。これは超音波診断が妊婦健診には必要不可欠な存在として、広く認識されていることを意味しているであろう。

以上、妊婦が超音波診断を用いた妊婦健診を希望するのは妊娠の継続、胎児の生存、胎児の成長、胎児の形態、性別等の確認が行えるためであった。すなわち超音波診断を含む妊婦健診を希望する妊婦は、元々超音波診断の臨床効果に対する期待があるために、毎回の妊婦健診時に超音波診断を受けることを希望し、その結果を聞くことが楽しみであった。そのことが妊婦の肯定的な心理を促していたと考えられる。換言すれば、画像を見せながら行う胎児診断の結果説明が、妊婦の心理的效果につながっていたのである。しかし、このことはその説明内容によっては反対に、妊婦の否定的な心理につながることも

示唆している。

では、超音波診断による胎児の視覚情報が、本当に妊婦の身体感覚を鈍化させたのか。次いで、超音波診断を受けた妊婦の心理と身体感覚について明らかにする。

2.3. 妊娠に伴う妊婦の心理と身体感覚

2.3.1. 妊娠初期の妊婦の語り

妊娠初期の妊婦は、つわりなどの症状によって妊娠の事実を認識していたが、身体的変化が殆どないために、それが直接妊娠の実感に結びつかず、画像上に写し出された像を見ることで妊娠の継続を確認していた。

①妊婦が実感できない妊娠初期の身体感覚

「超音波の方が現実的に実感があります。超音波を見ずにつわりだけだったら気のせい、想像妊娠とか。目で見せてもらわないと本当の(妊娠の)実感っていうのは(分からない)。今までは(お腹が)出てないから見えないわけでしょう。今はお腹が大きくなる、一寸膨れるからいるんだなあっていうのは分かるけど、画像になるとよりクリアになる。だから確認みたいな気がするだけで、普段はあんまり(妊娠しているとは)思わないですね」という。

身体的変化が殆ど現れない妊娠初期は、妊婦は妊娠をしている事実を認識しているが、それがまだ実感できないチグハグ感¹⁵⁾の状態であると考えられる。そのため超音波診断による胎児の視覚情報とそれについての説明が提供されることは、妊婦が妊娠の継続を確認するうえで有効的な手段であった。

2.3.2. 妊娠中期の妊婦の語り

妊娠中期になると、妊婦は腹部の増大や胎動の出現により妊娠の継続を実感し、胎児の存在を確実なものとしてとらえていた。また胎動を感じることににより、妊娠の経過が順調であるという安心感も得ていた。

①胎動による安心感

「自分の中では動いているから元気なんだなあって思って安心。逆に時間が空いて動いていないと心配で。今は中々動かないと心配になる。胎動を感じることで自覚している。(赤ちゃんの存在を)感じる回数は胎動のたびにどうしても感じるし、赤ちゃんを思う回数はぐっと増えた」という。

妊婦は胎動を自覚することで、妊娠経過が順調であることを実感し、胎児への愛情の意識も高めていた。

②身体的な変化による妊婦としての実感

「最近お腹周りが出てきて、前にかがんだりするのが苦しかったりするんですけど、段々からだが変わるのが実感につながってくる感じ。前はそんなに気持ち的なものがなかった。赤ちゃんが入ってるっていう実感。一寸動いても心臓がパクパクするし、体型とかもお腹は出てくるし、腰周りとかお尻の方とかも変わってくるし妊婦さんの身体になっている」という。

妊娠に伴う腹部の増大や身体的な変化を実感することも妊婦としての自覚を促す要因であった。

2.3.3. 妊娠末期の妊婦の語り

妊娠末期になると、妊婦はさらに顕著に出現する胎動や身体的変化により胎児の成長・発育を確信し、何か「もの」がいるという胎児観から「子ども」がいるという胎児観に変化していた。

①成長・発育を実感する顕著な胎動や身体的変化

「何回か節目じゃないけど、妊娠を実感する節目がある。つわりの時期、胎動を感じるようになったとき、おっぱいが出たときで、そのときはすごいビックリして。で、腹帯を巻くようになった時も妊婦さんだと思って。犬の日、後、実際にふくらみが急に、胎動が触らなくてもグーン、グングーン動き出してきたとかも。大きい変化の時は改めてすごい強く赤ちゃんの発育を思った」という。

以上、妊婦はつわり、胎動、腹部の増大、乳汁の分泌等、妊娠に伴う身体的変化により妊婦としての自覚を促していた。とくに妊娠中期以降の妊婦は、それが顕著であり、妊婦の身体感覚により妊娠の継続を実感し妊婦としての意識を高めていた。

②胎児観の変化

「お腹はよく触っていますね、お腹が出た頃からよく触っているなあ。早く会いたい、顔がみたい。どんな顔をしているのか楽しみ、生まれた赤ちゃんの顔を想像している」という。

胎動を感じる部位が拡大し胎児の動きも強くなると、妊婦の胎児に対する愛着意識は高まっていた。また胎児に対して生まれてくる「こども」を想像し、早く会いたいという出産に向かう準備意識も伺えた。

以上のことから、妊娠初期の妊婦は身体的変化が殆どないために超音波診断を受けることにより、妊娠の継続を確認し安心感を得ていたと考えられる。とくに自然流産の既往がある場合は、画像を用いた妊娠継続についての説明は、妊婦が安心感を得る上で効果的であった。妊娠中期に入ると、妊婦は胎動

や身体的変化を自覚し、それらの身体感覚により妊娠の経過や胎児の発育が順調であることを実感していた。妊娠末期になると顕著な胎動や身体的変化により胎児観が「胎児」から「こども」へと変わり、胎児に対する愛情も高まっていた。すなわち妊婦が妊娠を実感し、胎児への愛情をより高めたのは妊婦の身体感覚であったといえよう。

では、超音波診断を含まない妊婦健診を受けた妊婦の身体感覚はどうであったのか。次いで、超音波診断を含まない妊婦健診を受けた妊婦の心理と身体感覚を明らかにし、両者を比較検討することで超音波診断が導入されたことによる妊婦の身体感覚について考察した。

3. 超音波診断を含まない妊婦健診を受けた妊婦の体験

超音波診断を含まない妊婦健診を受けた妊婦に共通していたことは、超音波診断に対する期待が低いことであった。その理由は友人からの話や前回の妊娠の経験によるものであった。

3.1. 超音波診断に対する妊婦の意識

①興味を持てなかった超音波診断

「友達に超音波診断の写真を見せてもらったんだけど、何が写っているのか分からなかった。今は超音波がないはないなりにいいと思っています。色々想像の中で子供が育っていく。頭の中でも想像できるから、心音も聞けるしそれだけでもなんか十分な感じがします。別に自分が元気だったら超音波なくたって(赤ちゃんは)元気にいる」という。

妊婦は、友人が見せてくれた断層写真の識別ができず、それが超音波診断に対する関心を高めなかったという。またこの妊婦は、母体が正常であれば胎児の発育も順調であるという妊娠観があり、そのことが超音波診断に対する興味を持たさなかったことの一因であったとも考えられる。

②胎児の存在が実感できない胎児画像の説明

「(画像上に写し出された)写真だけ見ていたら、自分のお腹の方向性も分からないし、どこに(胎児の)頭があるのかも。先生がここに頭があるなんていうことは一度もおっしゃらないです、病院だと。なんか分からないんですよ。(中略)なんか分からないんですよ、どこに頭があって何が写っているのか。(画像上の像を見ても)実際自分のお腹の中のどこにいるのか、自分の赤ちゃんが成長しながらどこにいるのかっていうの、中々わかりにくい」という。

経産婦の場合は、全員が前回の妊婦健診の経験を

語った。つまり胎児画像を指示した胎児に関する説明では、妊婦の身体感覚として胎児の存在を実感することができず超音波診断に対する関心が低下したという。また同法が持つ臨床効果の限界も分かったためであった。

以上、妊婦が超音波診断を含まない妊婦健診を選択したのは、元々超音波診断に対する関心が低いためであった。また経産婦の場合は、前回の出産経験から胎児画像を見ても胎児の存在は実感できず、妊婦の身体にどう胎児が位置しているのかも分からないためであった。すなわち妊婦の身体感覚として胎児の存在を体感できないことが、超音波診断に対する関心につながらなかったといえる。また妊婦自身が持っている妊娠観も、超音波診断への関心を高めなかった理由のひとつであると考えられた。

3.2. 超音波診断を含まない妊婦の心理と身体感覚

超音波診断を含まない妊婦健診を受けた妊婦に共通していたのは、つわり等の身体感覚により妊娠の継続を確認していることであった。それは初産婦、経産婦共に同様であった。そして腹部触診法が可能になる妊娠中期以降になると、腹壁の上部から胎児を触られることにより胎児の大きさを体感し、妊娠の経過が順調であることを確認していた。

3.2.1. 腹部触診法による胎児の存在確認

①胎児の大きさや位置が分かる腹部触診法

「今こんなところが頭で、ここに頭があるんですよって教えられるでしょう、位置とか、ここが頭といわれると、あっ、いるいるっていうか、このくらいの大きさなんだっていうのが自分でわかって気分的に。大きさが分かったりするから。頭がここにあるのね、足があるのね、そういえばここを蹴ったなとか。そうすると、ああ大きくなってんだなあとか、なんかホッとしますね」という。

妊婦の腹部を触りながら行う腹部触診法は、妊婦自身の身体感覚で胎児の位置や大きさを体感させるものであり、この診察を受けた妊婦は全員が胎児の位置が良く分かるという。

以上、超音波診断を含まない妊婦健診を受けた妊婦は、胎児の位置を具体的に語るという特徴があった。これは超音波診断を受けなかったために妊婦の身体感覚が鈍化せず感受性が豊かなままなのではなく、妊婦が診察を受ける際に、妊婦の腹壁上から胎児に関する情報が詳細に伝えられるためであった。すなわち助産師が腹壁上から胎児を触り、その部位を妊婦に対して具体的に説明することは、妊婦の身体感覚で胎児の存在を体感させ、同時に胎児の身体各部を理解させることにつながっていたのである。

そのことは、日常生活の中で妊婦自身が胎児の成長・発育状態を推察し、自己管理をすることにもつながるものであると考えられた。

②胎児への愛着行動を促す腹部触診法

「こう触ってという楽しみ、楽しみっていうか見えないけどこう(お腹を)触った感じの(赤ちゃんが)大きくなっている感じっていうのは(楽しみ)。よくお腹は触ります。あっ、足がでてきたとかこれが手かなとか。赤ちゃんと遊んでいる感じ」という。

また腹壁上から行われる胎児の診察は、妊婦がどの程度妊婦自身の腹部を押さえて胎児を触っても大丈夫なのかを理解させることにつながり、それが妊婦と胎児の触れ合う機会を触発していた。

③胎児の異常に対する不安

「やっぱり不安はありますよね、それなりに。五体満足であるかどうかとか赤ちゃんのことであったり、安産でいうか、痛みが大丈夫かなっていう不安はあります」という。

超音波診断がなくても胎児の発育は心配がないと語っていた初産婦は、その一方で胎児の形態異常に関する不安も表出していた。経産婦もそれは同様であり、胎児の発育は身体感覚で確認できても、胎児の異常に関しては生まれてくるまで不安は払拭できないという。つまり腹部触診法により胎児の成長・発育は確認でき安心感につながるが、胎児の異常に関する不安は常に内在し出産するまで持続されるものであった。しかし助産師が説明する「出産は正常である」「お母さんが元気だったら大丈夫」という言葉が、異常性についての不安を軽減させていたと考えられる。

以上、超音波診断を含まない妊婦健診を受けた妊婦は、腹部触診法による胎児診察とそれに伴う詳細な説明を受けることによって、妊婦の身体感覚として胎児の胎位・胎向や身体各部を体感し、その部位や動き方を理解していた。またそのことが妊婦自身の自己管理意識にもつながっていたと考えられる。さらに妊婦は腹部触診法を通じて胎児の触り方もまなび、「触って楽しむ」胎児の愛着行動も促していた。

考 察

1. 妊婦の心理的効果を促す胎児画像の存在と診察者の説明

既存研究での報告と同様に、本研究でも超音波診断を含む妊婦健診を受けた妊婦は、胎児画像を見ることで人の存在を認知し、安心したとか嬉しい等の肯定的な心理を表出していた。とくに妊娠初期の妊婦は妊娠している事実が妊婦自身により実感するこ

とができないために、胎児画像をみることは妊娠の事実を確認する上で効果的であった。また前回の妊娠が自然流産であった場合等は、胎児画像を見ることで妊娠の継続を確認し妊婦の安心感につながっていた。そして妊娠中期以降になると、妊娠週数に伴って変化する胎児画像は妊婦に胎児の成長・発育を想像させるものであった。

しかしその一方で、本研究で明らかになったことは、妊婦は断層像と胎児画像を明確に識別しているとはいえないことであった。不明瞭な断層像を人の存在として認知するのは診察者の説明、妊婦の想像・解釈による画像の補足¹⁶⁾、妊娠反応が陽性という診察の文脈効果等がその認知要因であった。なかでも診察者の説明が果たす役割は大きく、妊娠診断や胎児の存在確認および正常性の説明等、超音波診断の診断結果を説明することは妊婦の心理的効果を高める重要な要因であった。

すなわち既存の量的研究で多数報告されてきた胎児画像を妊婦が見ることの心理的効果とは、上記の要因が複合的に妊婦の意識に影響を与えた結果であったと考えられる。

2. 妊婦の身体感覚により実感する妊娠の経過

Dudenは、胎児の視覚情報が妊婦に提供されることで妊婦の身体感覚が鈍化したと考証した。しかし本研究結果では、超音波診断を含む妊婦健診を受けた妊婦と、超音波診断を含まない妊婦健診を受けた妊婦は、双方共に胎動や腹部の増大または乳腺の発達により妊娠の継続を実感し、胎児の成長・発育を確認していたことが明らかになった。つまり妊婦は妊娠各期に出現する身体的変化の特徴により、妊娠の経過が順調であると確信していたのである。また妊婦はそうした徴候を体感することで、胎児への愛着や妊婦としての自覚を高め、胎児観を変化させていた。とくに胎動は妊婦にとって重要な位置づけにあり、Dudenが記述する「女性自身にとっても最初の胎動は意味を失ってしまった」¹⁷⁾ということは本研究結果からはいえなかった。

すなわちドゥーデンのいう、胎児情報の視覚化が妊婦の身体感覚を鈍化させたという状態は、本調査結果からは明らかにならなかった。

3. 妊婦の自己管理につながる腹部触診法

両場面に存在する妊婦は、双方共に妊婦の身体感覚により妊娠を実感し胎児の存在を確認するという共通の語りが見られた。しかし妊婦診察に関する両者の語りを比較検討した場合、超音波診断を含まない妊婦健診を受けた妊婦の語りには、胎児の位置や動きを詳細に語るという特徴があった。それは妊婦診察を実施する際に診察者が行った腹部の触診が功

を奏したものであり、腹壁上から胎児を触って説明することが、妊婦に胎児の身体各部の存在位置を具体的に伝えていたのである。またこの診察方法を通して、妊婦は胎児の触り方も学び、胎児への愛着行動を促していた。

すなわち腹部触診法により実施される胎児診察は、妊婦が感じる身体感覚の意味を説明すると同時に、妊婦自身が行う妊娠の自己管理を伝授する役割があったと考えられる。

結 論

超音波診断が妊婦健診に導入されて以降、同法は急速に普及し、いまでは必要不可欠な存在であるといっても過言ではない。従来は不可視な存在であった胎児が、同法により可視化できるためであり、視覚による胎児情報の獲得は妊婦と診察者の双方にとつ

て福音であったといえる。そのため胎児診断が行える超音波診断は妊婦健診の中心に位置づけ、助産師が従来実施してきた腹部触診法は古典的手法として紹介されるようになった。

しかし本研究結果で明らかになったように、腹部触診法による胎児診察は、ただ単に胎児の診察を行うだけでなく、妊婦が持つ身体感覚の意味を伝え、妊婦自身で自己管理が行える方法を伝授する。また妊婦と胎児の触れ合う方法も伝える役割があった。

したがって妊娠初期の妊婦にはとくに有益であった超音波診断の特徴と、妊婦の身体感覚の意味を伝える腹部触診法を併用しながら、双方が持つ長所を活かした妊婦健診のあり方が望まれる。

なお、本研究は平成13年度～平成14年度文部科学省科学研究費の助成を受けた研究の一部である。

文 献

- 1) Zlotogorski Z, Tadmor O, Rabinovitz R and Diamant Y: Parental attitudes toward obstetric ultrasound examination. *Journal of Obstetric Gynecology Research*, **23**(1), 25-28, 1997.
- 2) Bennett CC and Richards DS: Patient acceptance of endovaginal ultrasound. *Ultrasound Obstetrics Gynecology*, **15**(1), 52-55, 2000.
- 3) Kemp VH and Page CK: Maternal prenatal attachment in normal and high-risk pregnancies. *Journal of Obstetric, Gynecologic, and Neonatal Nursing*, **9**, 179-184, 1987.
- 4) Hunter MS and Tsoi MM: Ultrasound scanning in women with raised alpha-fetoprotein; long term psychological effects. *Journal of Psychosomatic Obstetrics and Gynecology*, **6**, 25-33, 1987.
- 5) Tsoi MM and Hunter M: Ultrasound scanning in pregnancy; Consumer reactions. *Journal of Reproductive Infant Psychology*, **5**, 43-48, 1987.
- 6) Langer MR and Reinold ME: Psychological effects of ultrasound examination: change of body perception and child image in pregnancy. *Journal of Psychosomatic Obstetrics and Gynecology*, **8**, 199-208, 1989.
- 7) Reading A and Platt T: Impact of fetal testing on maternal anxiety. *Journal of Reproductive Medicine*, **30**, 907-910, 1985.
- 8) 松本清一: 母性看護学各論2, 医学書院, 東京, 84, 1999.
- 9) Grace JT: Does a mother's knowledge of fetal gender affect attachment?. *Maternity Child Nursing*, **9**, 42-45, 1984.
- 10) Kemp J, Davenport M and Pernet A: Antenatal diagnosed surgical anomalies: the psychological effect of parental antenatal counseling. *Journal of Pediatric Surgical*, **33**(9), 1376-1379, 1998.
- 11) Heidrich SM and Cranley MS: Effect of fetal movement, ultrasound scans, and amniocentesis on maternal-fetal attachment. *Nursing Research*, **33**(2), 81-84, 1989.
- 12) Duden B, 田村雲供訳: 胎児へのまなざし, 阿牛社, 東京, 117, 1991/1993.
- 13) Duden B, 田村雲供訳: 胎児へのまなざし, 阿牛社, 東京, 84, 1991/1993.
- 14) 母子衛生の主なる統計, 厚生省児童家庭局母子衛生課監修, 45, 2003.
- 15) 青木康子, 加藤尚美, 平沢美恵子: 母性の心理・社会学, 日本看護協会出版, 東京, 183, 2001.
- 16) 鯨岡俊: 心理の現象学, 世界書院, 東京, 107-109, 1995.
- 17) Duden B, 田村雲供訳: 胎児へのまなざし, 阿牛社, 東京, 84, 1991/1993.

(平成17年5月31日受理)

**The Emotional and Physical Experience of Pregnancy :
A Comparison of Pregnant Women Who Are Examined Using Ultrasound
and Those Who Are Not**

Emiko SUZUI

(Accepted May 31, 2005)

Key words : ultrasound, view of the fetus, antenatal examinations, physical sensations

Abstract

Seeking a qualitative and inductive analysis of women's accounts of their experiences with antenatal examinations, I conducted semi-structured interviews with women who did and did not receive examinations that provided ultrasound. (All subjects' examinations were conducted by midwives at midwife-operated maternity homes.) The following subjects were covered: (1) Impressions of ultrasound scan examinations, (2) feelings on seeing sonograms; (3) what could actually be discerned from the sonograms; (4) feelings about being pregnant.

All subjects in the ultrasound group showed positive feelings of happiness and reassurance at having seen their sonograms, as they confirmed normal fetal development. On the other hand, their responses were much less well defined when they were asked what they were able to make of the images themselves. This psychological effect, however, was not solely the result of seeing the image; rather, the examiners' explanations had a major effect. Seeing the fetal images did not diminish the subjects' body awareness.

Correspondence to : Emiko SUZUI

Department of Nursing, Faculty of Health and Welfare

Kawasaki University of Medical Welfare

Kurashiki, 701-0193, Japan

(Kawasaki Medical Welfare Journal Vol.15, No.1, 2005 85-93)